

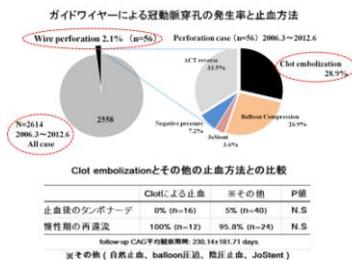
20015

PCI 中のガイドワイヤーによる冠動脈穿孔に対する自家製血栓塞栓の止血効果と予後検討

¹草津ハートセンター

中西 基修¹、前川 正行¹

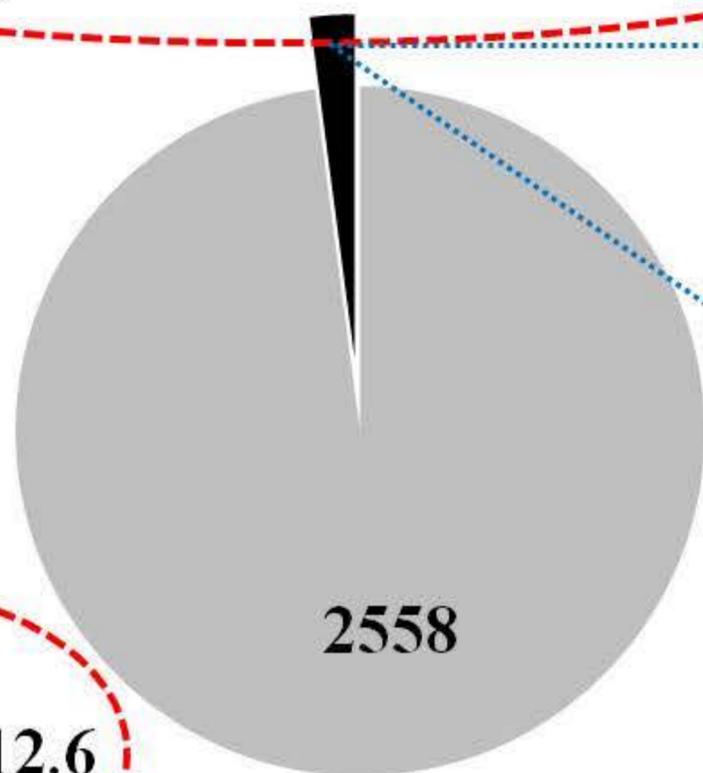
【目的】ガイドワイヤーによる冠動脈穿孔は主たる術中合併症の一つであり、当院においても全症例の 2.1% (n=2614) CTO 病変においては 13.8%(n=273)の確率で生じている (P<0.01)。例え小さな冠動脈穿孔でも重篤な合併症に移行するため、デバイスによる圧迫止血が困難な場合には塞栓術が必要になる。コイルや脂肪組織を用いた止血方法に対し、当院では積極的に血栓による止血を行っており、今回止血効果と慢性期の血流回復の状態を検討した。【対象】2006年3月から2012年6月までのガイドワイヤーによる冠動脈穿孔症例で血栓塞栓にて止血した16例。※12例でフォローCAGを施行。PCI中はヘパリン化しているため、トロンビン粉末を用いて血栓を作成した。【結果】図参照。【考察】止血効果は、他の方法と差はなく止血後のタンポナーデは発生しなかった。慢性期の開存率は100%であった。血栓塞栓は注入時の視認性についてコイルには劣るが、慢性期には穿孔部位の血流は回復していたため、安全性と予後成績は問題なく有効な止血方法である。



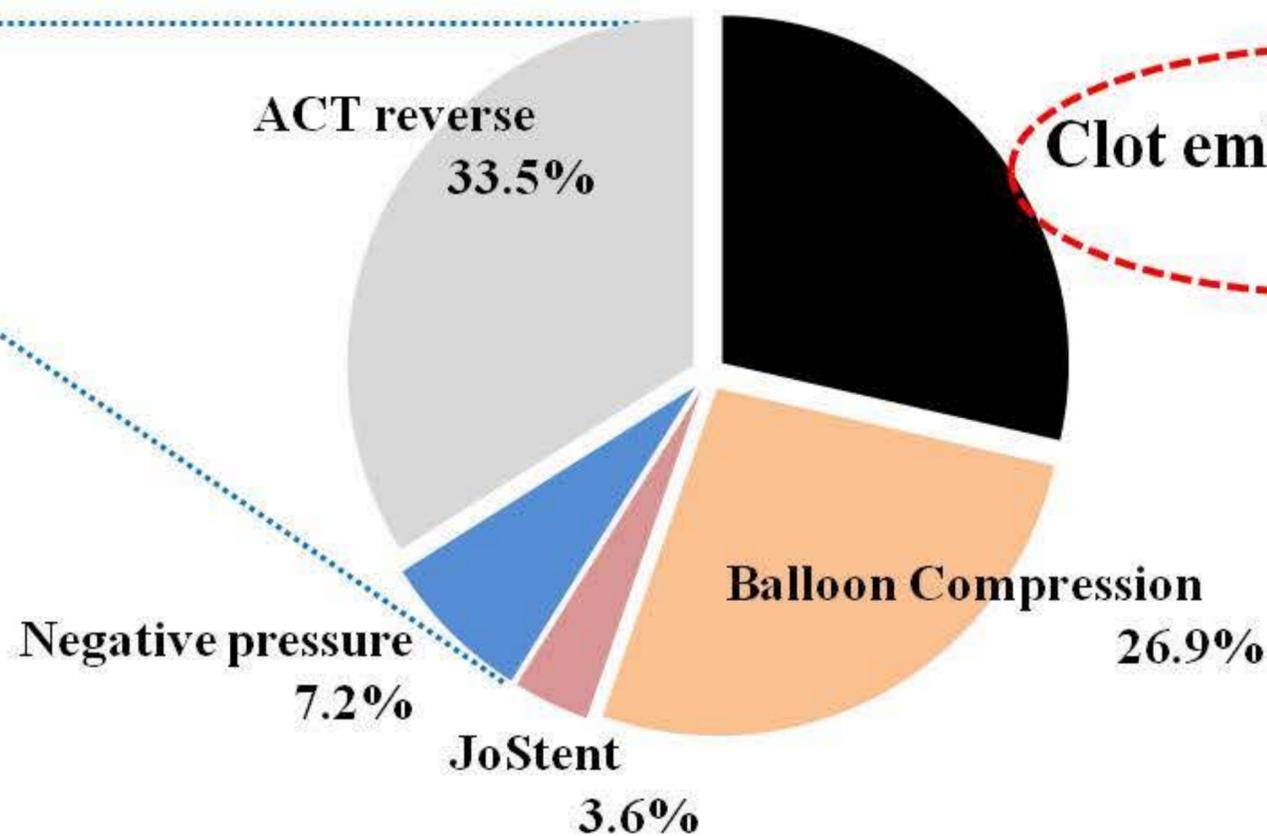
ガイドワイヤーによる冠動脈穿孔の発生率と止血方法

Wire perforation 2.1% (n=56)

Perforation case (n=56) 2006.3~2012.6



N=2614
2006.3~2012.6
All case



Clot embolizationとその他の止血方法との比較

	Clotによる止血	※その他	P値
止血後のタンポナーデ	0% (n=16)	5% (n=40)	N.S
慢性期の再還流	100% (n=12)	95.8% (n=24)	N.S

follow-up CAG平均観察期間: 230.14±181.71 days

※その他 (自然止血、balloon圧迫、陰圧止血、JoStent)